『キミはキミ ボクはボク』

梅花空木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『キミはキミ　ボクはボク』

【Ｎコード】
Ｎ９４３１Ｈ

【作者名】
梅花空木

【あらすじ】
平和な人間界で相変わらずぐーたらと過ごしていた伏義。彼は親友・普賢に逢いたいが、今だ逢いに行けずにいる。そんな折、仙人界で普賢の様子を聞き…！？

人間界が導のなき道を歩み始めて、数えるのも億劫になるくらいの年月がすぎた。
人間界で気ままに暮らしていた伏義は、相変わらずぬけるような青空を眺めていた。
「んー。最近は、スープーたちも来ぬし、暇だのぅ。」座ったまま背筋を伸ばし、独りごちる。聞こえてくるのは鳥のさえずりと、風が草木を揺らすサヤサヤという音だけだ。
しばらく耳をすませてまわりの音を聞いていると聞き覚えのある懐かしい声が風に紛れて聞こえた気がして、思わず振り返った。
《望ちゃん…》そう聞こえた気がする。今もっとも逢いたくて、でも変わってしまった自分に対する相手の反応が怖くて、逢えない空色の髪とアメジストの瞳をもった親友…。瞼を閉じると彼の向日葵のように眩しく、温かい笑顔が思い出される。
「…今更だ、な。」自嘲ぎみにつぶやく。どうせもう逢えないのだから、いつまでも未練を残していても仕方ないのだ。
…逢いたい…逢えない…。どうしても、断ち切ることのできない想いが胸の中でわだかまっている。

たまに仙人界にも顔を出して、一緒に戦った仲間たちと他愛ない話をする。
ずっと望んでいたことのはずなのに、何か物足りない気がしていた。
「おっ太公望。久しぶりだね。」そう声をかけてきたのは太乙だ。
彼は、昔から気さくに接してくれる。。伏義になってからもそれは、変わらず、それは今の自分にとって、とても嬉しいことだった。
「そういえば、気が向くと仙人界には来るみたいだけど、普賢とは逢ってるかい？」
「別に…わしらはもう子どもではないし、一緒にいる理由もない。

なんでそんなことを聞く？」自然と冷めた口調になってしまった。
「いやぁーなんだか普賢が君が伏義になって人間界にいるようになってから、元気がないように思ってさ。いつも通り笑顔だけど、泣きそうっていうかね。」太乙は思案するような顔をうかべた。
（…普賢が？まさか。…自分たちはそんなに依存していた間柄だったろうか。）
そう思いつつも、普賢のいる神界へと急ぐ。神界とは、仙人界と人間界の間に作られた世界のことだ。

廊下を抜けた先、そこはどこまでも高い、澄みきった空と草木の緑だけの空間。そこで彼は空を見上げていた。音をたてないようにしのびより、後ろから優しく抱き締めるように目隠しする。
（そういえば、以前にも増して身体が華奢になった気がする…。）
「…飛びたいのか？」なぜだか彼の姿はそう思わせた。
「…っその…声は望ちゃん！？」びっくりしたのか、声をうわずらせて固まってしまった。
「その…なんだ。えっとぉまだあいさつをしにきてなかっただろう？」
「…今更？仙人界には何度も来ていたくせに。」普賢が腕の中で向き直り少しふくれてみせる。
「それはぁ…なんというか、気恥ずかしさというかだな。」つい、動揺してしまう。
「クスクス…わかってるよ。君は、王天君と融合して伏義となった。今更どんな顔して会えばいいのかって思ったんでしょ。」楽しそうに普賢が笑う。本当は普賢の反応が怖かったというのもあるのだが、そんなことどうでもよくなるくらいの愛しい笑顔。
「…そういえば。」ふっと我に返った。
「ん？なぁに？。」ふんわりと普賢が微笑む。
「おぬしは、まだわしのこと望と躊躇いなくよぶのだな。あの太乙でさえ最初は戸惑っていたのに。」

「何言ってるの？望ちゃん。王天君と融合したっていっても半分は望ちゃんなんだよ？僕が望ちゃんって呼ぶのは当たり前じゃない。」なるほど、確かにそうだ。簡単なことなのに考えもしなかった。誰もそんな風に言ってくれなかった。

「望ちゃん！大丈夫？」

「…んぁ？」何がと言おうとして、自分が泣いていることに気づいた。泣くのなんて人間の時以来だ。何千年ぶりだろうか。

一生懸命目をこすっていると、普賢が優しく頭の後ろに手をまわしてきた。

「ねぇ？望ちゃん。君は伏義になったことで僕らとも、人間界とも、距離をおこうとしてるけど、そんなのつらいだけだよ。望ちゃんは、何も変わってない。今の君も僕は好きなんだ。だからあんまりいろいろひとりで抱え込まないで。」普賢の声は、まるで聖母のように優しく、心を満たしていくようだった。

「だか、だが…今のわしにはおぬしの知らない部分がありすぎる。以前の『太公望』ではない。」普賢に身を預けたまま目をきつく閉じ、１番恐れていたことを口にする。

「じゃあさ、これからゆっくりでいいから聴かせてよ。僕の知らない部分を話して。全てを聴いたとしても、僕が望ちゃんのこと大好きな気持ちは変わらないよ。」笑顔の奥に彼の信念の強さが伺える。

「う…うむ。そうだな！わしも普賢の全てをだな…愛しいと思うぞ。」

お互いなんだか照れ臭くて目線をそらしてしまった。

そして、お互い同じことを思う。

（キミには一生敵わない。）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9431h/

『キミはキミ ボクはボク』

2010年10月28日05時15分発行